

近代教育思想の宗教的基層 (1)

—コトン・マザー『秩序ある家族』(1699)—

*佐藤 哲也

The Religious Basis in Modern Educational Thought (1)
— Cotton Mather, *A Family Well-Ordered* (1699) —

SATO Tetsuya

Abstract

Cotton Mather was one of the most influential ministers and a prolific puritan writer in colonial New England. He wrote many popular pamphlets and books on childrearing and religious education. This paper focuses on his booklet *A Family Well-Ordered* to study puritan view of childhood, parents-children relationships and education. The puritans saw the family as the foundation of all society. As a religious and political leader, Cotton applies and explicates the Bible's teaching on how to make family well-ordered, regenerate children to save their souls. The features of his arguments were as follows, casuistic Biblicism, poverty of modern view of childhood, warning of the original sin. In *A Family Well-Ordered*, Cotton expressed ambivalent feeling toward children, and, as an embryo of modern educational thought, his interests in controlling children's inner world.

Key words : ピューリタン、コトン・マザー、ニュー・イングランド、家庭教育、宗教教育

1. はじめに

コトン・マザー (Cotton Mather, 1663~1728) は、17世紀末から18世紀前半のニュー・イングランド (New England) における、最も著名なピューリタン・ライターの一人であった¹。当時の社会は、半途契約 (the Half-Way Covenant)²、原住アメリカ人との抗争 (King Philip's War, 1675~76)³、ニュー・イングランド王領化 (Dominion of New England, 1686~1688)⁴、セーラムの魔女裁判 (Salem witch trials, 1692)⁵等、宗教・政治・文化が大きく揺らいでいた。マザーは、危機に直面した移住第3世代の精神的指導者として、父祖達が荒野に築いてきたピューリタンの伝統を堅持しようとしていた。そうした努力は、説教をはじめ、歴史、伝記、



写真1 コトン・マザーの肖像

Cotton Mather, engraved by Peter Pelham, American Antiquarian Society, Worcester, Mass.

* 宮城教育大学幼児教育講座

エッセー、寓話等々、約400にも及ぶ彼の著作として現れている⁶。

本稿はそれらのなかでも、総合的視点から記述された育児書の嚆矢と評され、マザーの親子関係論や子育て論が展開されている『秩序ある家族』(*A Family Well Orderd*, 1699)⁷を取りあげる。本書は、危機の時代に先鋭化されたピューリタニズム (Puritanism) の生活倫理、子ども観、教育思想の宝庫であると言えよう⁸。

初期ニューイングランドでは、家族は「教会や共和国の学院」⁹「すべての社会の基盤」¹⁰「あらゆる社会の苗床」¹¹といったように、社会組織の基本であると見なされていた。マザー自身も「秩序ある家族は、自ずと他の社会組織の良き秩序 (Good Order) を創り出していく。家族の統制が崩れた時、他の社会的組織すべてが統制を失うのである」¹²と考えていた。基本的社会集団である家族、とりわけ親子を中心とした家族成員間の関係性を堅固にすることが、ニュー・イングランドの安寧を回復する手だてであると力説されていた。『秩序ある家族』は、社会秩序の動揺に対する保守派の危機意識を反映した家庭教育論であった¹³。

以下において、『秩序ある家族』執筆に関わるマザー自身の境遇や家庭生活に言及するとともに、彼の言説

内容を吟味することで、ピューリタニズムが近代教育思想の宗教的基層を為していく様を一瞥したい。

2. 家族生活をめぐるコトンの苦悩

コトン・マザーは17世紀ニュー・イングランド神聖政治 (Theocracy) 中枢を担う家系に生まれた¹⁴。彼の祖父リチャード・マザー (1596~1666) は、イングランド北西部ランカシャー (Lancashire) 出身の聖職者であり、1635年の大移住 (Great Migration) を経て、ボストン (Boston) に隣接するドーチェスター (Dorchester) の会衆派教会 (Congregational Church) に奉職した¹⁵。母方の祖父ジョン・コトン (John Cotton, 1585~1652) もまた、ニュー・イングランド第1世代の指導的聖職者にしてケンブリッジに学んだ知識人であった¹⁶。彼の父親インクリース (Increase Mather, 1639~1723) は、ボストンのエリートが集う北教会 (North Church) の牧師、ハーバード (Harvard College) の学長も務め (在職期間: 1685~1701)、ニュー・イングランドが王領化された際には、植民地特使として特許状再発行のために本国に派遣された¹⁷。

コトンの母マリア (Maria) は、結婚後ほぼ2年お

1 コトン・マザーの伝記的研究は、古典的なものから近年のものまで、数多く上梓されている。本稿においては、優れた歴史書に対してコロニア大学から授与されるバンクcroft賞 (The Bancroft Prize) を受賞 (1985年) したシルバマンの研究を参照した。Kenneth Silverman, *The Life and Times of Cotton Mather*, The Easton Press, 1984.

2 1650年代後半から1660年代初頭にかけて、回心者による「見える聖徒 (visible saints)」による会衆派教会主義 (Congregationalism) を標榜していたニュー・イングランド諸教会は、存続の危機に立たされていた。両親と共にアメリカに渡航した子どもたち、ニュー・イングランドで生まれた子どもたち、すなわち第2世代や第3世代への子どもたちへの信仰継承問題が顕在化したからである。

幼児洗礼を受けて教会に連なったにもかかわらず、成人後、回心 (conversion) と言える宗教体験を証しすることができない者が増加するなかで、1662年の教会会議によって、回心体験がなくても、教会が用意した誓約文に合意することで「中途会員 (Half-Way Member)」として教会員資格が得られるようになった。ただし、「半途会員」には、聖餐と教会選挙への参加が許されなかった。「半途契約」は、未再生者 (non regenerates) を教会の影響下に留め置こうとする妥協策に他ならなかった。Robert G. Pope, *Half-way Covenant: Church Membership in Puritan New England*, Princeton University Press, 1970.

3 フィリップ王戦争 (King Philip's War, 1675) は、ニュー・イングランド白人入植者と原住アメリカ人諸部族との間の通称「インディアン戦争」。白人は、「ワンパノアグ族酋長メタコメット (Metacmet, 1639~1676) を「フィリップ王」と呼んだ。白人、インディアン共に多くの犠牲者が出た。

4 ジェームズ2世 (James VII of Scotland and James II of England, 1633~1701) によって、マサチューセッツ港湾会社 (Massachusetts Bay Company) はその特許状を本国に召還され、法的根拠と自治権を失った (1685年)。翌年、ニュー・イングランド王領 (the Dominion of New England) として他の植民地と統合され、本国から総督アンドロス (Edmund Andros, 1637~1714) が派遣された。

5 ボストン北東部セーラム (Salem) で1692年3月1日から一連の魔女裁判 (witch craft) が開始された。200名近い村民が魔女として告発され、19名が処刑、1名が拷問死、5名が獄中死した。マザーも審問や処刑に出席し、それらの正当性を認めていた。「裁判中は、法定のやり方に対する最も果敢な批判者の一人であったのに、一旦裁判が終結すると、だれよりもそれを弁護する側に回ってしまった。」Chdwick Hansen, *Witchcraft at Salem*, Arrow Books, 1971 (飯田実訳『セイレムの魔術 17世紀ニューイングランドの魔女裁判』工作社, 1991) p.363.

6 例えば、浩瀚な労作『アメリカにおけるキリストの偉大な御業』(*Magnalia Christi Americana*, 1702) は、ピューリタンの業績を教会改革の視点から論じたものであった。また、フランクリン (Benjamin Franklin, 1706~1790) の愛読書としても知られる『善行論』(*Bonifacius: or Essays to Do Good*, 1710) では、ピューリタニズムの実践倫理が具体的な生活指針として示された。『シオンの娘の装飾品』(*Ornaments for the Daughters of Zion*, 1692) はピューリタン家族における理想の女性像が描かれていた。『ニュー・イングランドの子どもたちへの贈り物』(*Token for Children of New England*, 1700) は、若年層を信仰へと導くための回心体験録であり、宗教教育の手引きであった。マザーの著作目録として次の資料がある。Thomas J. Holmes, *Cotton Mather: A Bibliography of His Works*, 3vols, Blue Mountain Books & Manuscripts, 1974.

表1 Cotton & Abgal 夫妻の子どもたち¹⁸

year	Cotton Mather	Abgal Philips	Abgal	Katherine	Mary	Joseph	Abgal	Methetabel	Hannah	Increase	Samuel	Unnamed
1686	結婚	結婚										
1687	24	17	誕生									
1688	25	18	死亡									
1689	26	19		誕生								
1690	27	20		1								
1691	28	21		2	誕生							
1692	29	22		3	1							
1693	30	23		4	死亡	誕生						
1694	31	24		5			誕生					
1695	32	25		6			1	誕生				
1696	33	26		7			2	死亡				
1697	34	27		8			3		誕生			
1698	35	28		9			4		1			
1699	36	29		10			5		2	誕生		
1700	37	30		11			6		3	1	誕生	
1701	38	31		12			7		4	2	死亡	
1702	39	死亡		13			8		5	3		誕生

きに妊娠・出産を繰り返し、インクリースとの間に10人の子どもをもうけたという¹⁹。コトンはインクリースの第一子として生まれ、長子として将来を囑望され

た。彼は、話し始めるやいなや祈りの訓練を受け、文字を習い、幼少期よりヘブライ語、ギリシャ語を学び、ラテン語を習得した。11歳半でハーバードに入学して神学や医学を修めた。幼くして知的才能を発揮したコトンであったが、名家の跡継ぎとしてのプレッシャーに苛まれ、吃音を患っていたという²⁰。紆余曲折の後、15歳でハーバードを卒業した後、父親が牧会するボストン北教会に迎えられた。1680年8月22日、ドーチェスター教会での説教を皮切りに、聖職者としての道を歩み始めた²¹。

1686年5月4日、23歳の時、コトンはアビゲイル・フィリップス (Abigail Philips, 1670~1702) を妻に迎えた²²。彼女はボストンに隣接するチャールズタウン (Charlestown) 出身であり、裕福かつ敬虔な家庭で育った女性であった²³。二人の結婚生活は16年間続いた。その間、アビゲイルは11名の子どもを出産した。避妊や堕胎が禁忌されていたので、母乳育の避妊効果を考慮すると、当時の女性たちは結婚後数ヶ月で妊娠、閉経に至るまで約26ヶ月に1度、平均10回前後、出産を繰り返していたという²⁴。アビゲイルも例外なく、こうした人口学的再生産過程のなかに投げ込まれていたのである (表1)。しかし、度重なる妊娠・出産は彼女の身体を疲弊させていった。1702年5月、男児を死

- 7 本稿では、B. Green, & F. Allen, for Michael Perry, at his Shop over-against the Town-House: & Benjamin Eliot, at his Shop under the West-End of the Town-House, 1699 (マイクロフィルム版) を利用する。近年では、Soli Deo Gloria Publicarions から注文印刷版が販売されている。
- 8 N. Ray Hiner, "Cotton Mather and His Female Children: Notes on the Relationship between Private Experience and Public Thought", *The Journal of Psychohistory*, Vol.13, No.1, 1985, p.35
- 9 Eleazar Mather, *A Serious Exhortation to the Present and Succeeding Generations in New England*, Cambridge, 1671, p.10
- 10 Samuel Hooker, *Righteousness Rained from Heaven*, Cambridge, 1677, p.25
- 11 Cotton Mather, *A Family Well Ordered*, Boston, 1699, p.3.
- 12 *ibid.*, p.4.
- 13 17世紀のピューリタン家族の間に最も普及していたガウジ (William Gouge, 1575~1653) の家政書には、次のように記されていた。「家族は小さな教会、小さな共和国であり、少なくとも、それらを生き生きと表したものである。そこでは、教会と共和国における、あらゆる威厳的、服従的立場にあわせた予行演習が行われる。あるいは、家族とは、統治に関する至高の原理と基本が教えられる学校であり、人々は教会や共和国のより高次な問題についての準備をしていくのである。」ピューリタンが社会秩序の起点を家族に求めたのは、宗教的弾圧化、ピューリタニズムが地下運動として発展していったことと無関係ではないだろう。William Gouge, *Of Domesticall Duties, second edition*, London, 1626, pp.16-17.
- 14 マザー一族3世代に渡る研究として次のものがある。Robert Middlekauff, *The Mathers: Three Generations of Puritan Intellectuals, 1596-1728*, Oxford University Press, 1971.
- 15 B.R. Burg, *Richard Mather of Dorchester*, The University Press of Kentucky, 1976.
- 16 Larzer Ziff, *The Career of John Cotton: Puritanism and the American Experience*, Princeton University Press, 1962.
- 17 Michael G. Hall, *The Last American Puritan: The Life of Increase Mather*, Wesleyan University Press, 1988.
- 18 N. Ray Hiner, "Cotton Mather and his Children: The Evolution of a Parent Educator, 1686-1728", Babara Finkelstein ed. *Regulated Children/Liberated Children: Educaion in Psychohistorical Perspective*, Psychohisory Press, 1979, p.30 及び Ronald A. Bosco ed., *Paterna: The Autobiography of Cotton Mather*, Scholars' Facsimiles & Reprints Delmar, 1976, p.92 より作成。
- 19 Hall, *op. cit.*, p.50.
- 20 Silverman, *op.cit.*, pp.7-16.
- 21 *ibid.*, p.24.
- 22 コトン・マザー自身の家族生活、特に父親としての私生活を理解する上で、ハイナー (Hiner) による研究はたいへん示唆に富む。彼は歴史心理学の視点から、当時の子どもたちをめぐる人口学的事実がコトンの子ども観や教育思想に及ぼしたのか研究している。

産した後、彼女の健康状態は著しく悪化して、年末に天に召されてしまった²⁵。

交易の中心地ボストンの衛生状態は決して良好なものではなかった。天然痘、はしか、猩紅熱、その他様々な伝染病が定期的に流行して、人々の命を奪っていった²⁶。アビゲイル死亡時、存命していた子どもは、男児1名（3歳）、女児3名（5歳、8歳、13歳）であった。男児5名中4名、女児6名中3名が死亡していたのである。

第1子夭折の事例を挙げてみよう。1687年8月22日、マザー夫妻に女児が誕生した。その名は母親と同名のアビゲイルと名付けられた。コトンの喜びは並々ならぬものであった。彼の自叙伝には次のように記されている。「主は私に娘を賜った（恐らく、この世で見てきた幼児の中でも一番の器量よしであった）。」しかしながら「その子は、約5ヶ月になったとき、主の日の午前中、私が公務から戻ってくると、突然ひきつけを起こして亡くなった。」²⁷ この悲劇をコトンは神の戒めとして捉え、ピューリタン神学者らしく決義論的に理解しようとした²⁸。それが『悲しみの時の正しき思索』である²⁹。乳幼児死亡率が非常に高かった当時、マザー夫妻と同じ体験をしていた人々は枚挙に暇がなかった。我が子を亡くして悲しみと喪失感に打ちひしがれていた会衆に向かい、コトンは「子どもを失うことは、私たちから片腕が引きちぎられるようなものである」³⁰と訴えた。その一方で、こうした苦難と試練を克服すべく修練を積むことで、両親の信仰が深まっていくと教えていた。「あなたが失った子どもは、主イエスの領地、つまり彼自身が支配する新しき世界で安らいでいる。

貴君よ、至高の幸福が待っている主の御業に打ち満ちた御国に入るべく、信仰に励もうではないか。なぜなら、あなたは祝福された子どものもとへと行くことができるが、彼らはあなたのもとには帰ってこないからである。」³¹ コトンは、子どもの生死をめぐる神意を推し測り、亡くなった子どもの救いを確信することで、両親を慰め、さらなる敬神へと導こうとしたのである。彼は、現世に残された両親が信仰を失い、救いの道から外れることがないように戒めたのである。

第一子アビゲイル亡き後、マザー家には、キャサリン（Katherine）とメアリー（Mary）が与えられた。娘たちの誕生に併せるかのごとく、コトンは育児書や礼儀作法書を上梓していった。『シオンの娘の飾り物』³²は二人の娘の教育をめぐるコトンの思索が結実したものであり、『悩める両親への手引き』³³には子育てについての彼自身の不安が投影されていた。子どもをめぐる様々な喜びと苦悩、神からの賜物を立派に育てあげることへの責任感、これらがコトンを育児書や礼儀作法書の執筆へと駆り立てていったのであろう。

『秩序ある家族』の草稿がまとまった1699年前半、コトンは36歳、妻アビゲイル29歳、二人の結婚生活は13年目を迎えていた。10歳を筆頭に、5歳と2歳の娘に恵まれていた。しかしその間、マザー夫妻は4人の子どもを亡くしていた。この年のはじめ、コトンの娘たちに災厄が降りかかった。長姉キャサリンと末妹ハンナが大火傷を負ったのである。1699年1月30日の日記には次のように記されていた。「末娘ニビー（Nibby）が二人の姉と一緒にいたときに、暖炉の燃える火のなかに真っ逆さまに転げ落ちた。しかし不思議な天の摂

23 Silverman, *op. cit.*, p.51.

24 避妊に関するプロテスタントの見解については次の文献が参考になる。Angus Maclaren, *A History of Contraception: From Antiquity to the Present Day*, Blackwell, 1990, pp.150-151.

25 Silverman, *op. cit.*, pp.179-186.

26 Rebecca Tannenbaum, *Health and Wellness in Colonial America*, Greenwood, 2012, pp.91-92.

27 Bosco ed., *Paterna*, p.92.

28 決議論（casuistry）とは、良心の疑念に解決を与える倫理という意味の造語であり、具体的な事態（case）に対処するための実践倫理の体系のことである。大木英夫『ピューリタニズムの倫理思想—近代化とプロテスタント倫理との関係—』新教出版社, 1966, p.21.

29 Cotton Mather, *Right Thoughts in Sad Hours, Representing the Comforts and the Duties of Good Men under All Their Afflictions; And Particularly, That One, the Untimely Death of Children in a Sermon Delivered at Charles-town, New-England; under Fresh Experience of That Calamity*, London, 1689.

30 *ibid.*, p.51.

31 *ibid.*, A3.

32 Cotton Mather, *Ornaments for the Daughters of Zion or the Character and Happiness of a Virtuous Woman: In a Discourse which Directs the Female Sex How to Expect the Fear of God in Every Age and State of Their Life; and Obtain both Temporal and Eternal Blessedness*, Boston, 1692.

33 Cotton Mather, *Help for Distressed Parents or Counsels and Comforts for Godly Parents Afflicted with Ungodly Children and Warnings unto Children to Beware of All Those Evil Courses which would be Afflictive unto their Parents*, Boston, 1694.

理によって、両手と顔に火傷を負ったものの、永遠の罰に処せられる前に引き上げられたのである。」³⁴ コトンはこの惨事を信仰的に受け止めた。「書齋に籠もっていた私がそこに居合わせなかった際、二人の娘がそこにいたが、末娘のナニー(Nanny)が火のなかに落ちた。この転倒によって、特に左顔面と右手、右腕が激しく焼かれた……ああ、私の罪のために、正義の神は私の子どもを火の中に投げ込んだのだ！」³⁵ その翌月(2月22日)、蠟燭を運んでいた際、その火が肩掛けやかぶり物に引火して、長姉キャサリンが大火傷を負った³⁶。コトンは、自分に変わって娘たちが神から罰せられたのだと戦慄した。

これらの事件の直後から、彼は親子関係を基軸とした家族生活をテーマに掲げた講演や説教に着手していった。折しも名誉革命(Glorious Revolution, 1688-1689)後に再交付された特許状によって宗教における寛容が強要されたことで、ニュー・イングランドにおけるピューリタン支配は終焉を迎え、会衆派教会は世俗的統治体と一体化した体制教会から、教派型教会へと転じていた³⁷。公私に渡って動揺が走るなか、コミュニティーの精神的、政治的指導者であるコトン自身にとって、あるいは第4世代への信仰の継承に苦慮する会衆にとって、信仰と生活の拠点である家族のありようを見直すことは、重要な作業であったのである。

3. 『秩序ある家族』の構成と特徴

家族生活をめぐる一連の考察は、1冊のパンフレットとして公刊された。それが『秩序ある家族』である。コトンは本書の扉に次のように記していた。

秩序ある家族

あるいは二つの非常に重要な問題に取り組むことで、親子双方が幸福を得るための小論。

1. 敬虔な両親は、子どもの敬神を促すために、いかなる義務を果たすべきか。
2. 従順な者として祝福を得るために、子どもは親

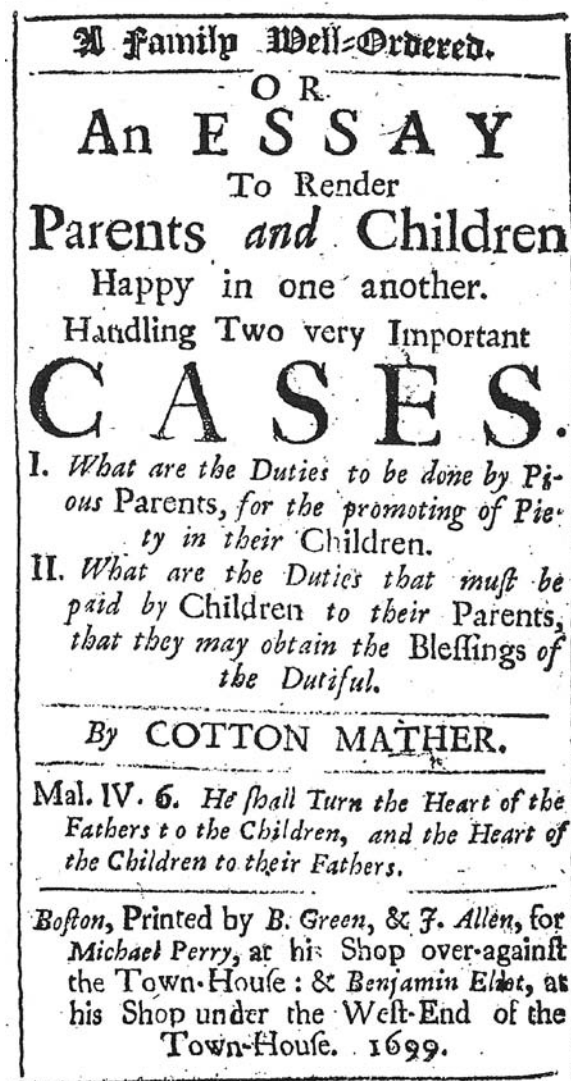


写真2 『秩序ある家族』表紙

にいかなる義務を果たさなければならないのか。

その上で、主題聖句として欽定訳聖書マラキ書第4章6節が掲げられた。

彼は父の心をその子どもたちに向かわせ、そして子どもたちの心をその父に向かわせる。

本書は、「子どもに対する親の義務」(pp.3-37)「親に

34 Worthington Chauncey Ford ed., *The Diary of Cotton Mather*, Frederic Unger Publishing, 1911, I, p.217.

35 *ibid.*, pp.282-284.

36 *ibid.*, pp.293-295.

37 Sydney E. Ahlstrom, *A Religious History of the American People*, Yale University Press, 1972, p.97, 柳生望『アメリカ・ピューリタン研究』日本基督教団出版局, 1981, p.179.

対する子どもの義務」(pp.38-79)「学校教育の奨励」(補遺 :pp.1-5) といった3部構成であった。

家政書、育児書としての『秩序ある家族』の特徴として、次の3点を挙げることができる。それらは、(1) 聖書主義的決義論 (casuistry)、(2)子どもに対する近代的まなごしの貧困、(3)原罪説 (original sin) 的人間観に彩られた論述、以上である。

1) 聖書主義的決義論

ピューリタンにとって聖書は信仰の指針であり、生活の手引き、道標であった。ピューリタン・ライターは、聖句 (出典・章・節) を掲げ、その解き明かしを通じて、信仰と生活の規範を示そうとしていた。『秩序ある家族』には、旧約から51箇所、新約から27箇所、合計78箇所から聖句が引かれていた (表2)。旧約聖書からの引用が多い点に、古代イスラエル信仰父祖の生きざまや格言から家族生活の規範を読み取ろうとするコトンの姿勢が窺える。なかでも、格調高い文学的テキストに溢れる詩篇 (Psalms) と箴言 (Proverbs) から、様々な警句が引き出されていた。具体例を挙げてみよう。

詩篇34章1節、4節、11節において、詩篇作者は、初めに「私は主を讃え」、それから「私は主を求め」、そして「汝、子どもらよ、来なさい。私は主を畏れることを教えてやろう」と述べていた。おお、親たちよ。神の御名によって、あなた自身の悲惨な魂に注意を払いなさい。自分自身のために何もできない愚か者が、子どもたちの魂に何をし得られるというのだ³⁸。

親子関係をめぐる倫理を語るにあたり、コトンは聖書からの類推によって、道徳的・宗教的規範を生活事例に適用しようとした。決義論と称されるこの思考法は、彼のみならず、多くのピューリタン・ライターに通底する特徴であったのである³⁹。

2) 子どもをめぐる近代的まなごしの貧困

ピューリタン家族における親子関係の倫理を説く本書は、17世紀ニュー・イングランドにおいて、育児に関して最も包括的な視点から書かれていたと評価されている⁴⁰。しかし、ロック (John Lock, 1632-1704) が同時代に出版した『教育に関する考察』(1693年)⁴¹と比べると、コトンの著書は、内容において貧弱であり、近代教育学へと繋がる、大人とは異なる固有な発達段階としての〈子ども期〉へのまなごしが欠落していたと言わざるを得ない。特に、具体性 (realism)、社会的性差 (gender)、発達段階 (developmental stages) への視点の貧困は等閑に付すことができない。

具体性の欠如を例に挙げてみよう。本書は聖書からの引用や数々の警句・警告に充ち満ちているものの、当時のニュー・イングランドに暮らす親子の姿や子どもの成長の様子などの事例が一切挙がっていない。コトン自身の体験談すら紹介されていない。日常的な触れ合いや観察から子育てについて考察しようとする姿勢が皆無なのである。子どもの養育や親子関係を考えるためのエピソードは、その大半が聖書や古典的逸話等からの引用である⁴²。

表2 『秩序ある家族』引証聖書箇所一覧

創世記 18:19,33:5, 31:35,48:12,47:12	マタイによる福音書 28:19, 6:6 ルカによる福音書 18:1, 2:51
出エジプト記 12:19, 21:17	ヨハネによる福音書 1:5, 19:27
レビ記 19:3	使徒言行録 10:2, 18:8
申命記 6:6-7, 27:14,27:16,21:21,27:5-7	ローマの信徒への手紙 6:4, 1:30 ガラテアの信徒への手紙 3:27
ヨシュア記 8:35	エフェソの信徒への手紙 6:4, 6:3,6:1
サムエル記上 1:28,3:13, 2:25	コロサイの信徒への手紙 3:20, 3:23-24
列王記上 1:6, 2:19	テモテへの手紙一 3:4, 4:12, 5:4
列王記下 5:13	テモテへの手紙二 3:15, テトスへの手紙 2:7, 3:1-2
歴代誌上 28:9, 29:19	ヘブライ人への手紙 12:19, 13:17
詩編 34:1, 34:4, 34:11, 75:5-7, 34:11, 55:19, 127:5, 27:10, 127:5, 143:2	ペトロの手紙一 3:21, 2:18 ヨハネの手紙一 3:23
箴言 4:3-4, 22:6, 17:25, 13:24, 19:18, 23:13-14,29:15, 9:6, 31:10-31, 30:17, 30:17, 20:20, 31:28, 4:1, 1:8	
コヘレトの言葉 12:7	
イザヤ書 44:3	
ハガイ書 1:5	明朝体:両親の義務 (42)
マラキ書 1:6	ゴシック体:子どもの義務 (36)

38 Mather, *A Family Well Ordered*, pp.7-8.

39 大木英夫, 前掲書, pp.232-238.

40 Hiner, "Cotton Mather and His Children", p.32.

41 John Locke, *Some Thoughts Concerning Education*, London, 1693, 北本正章訳『ジョン・ロック『子どもの教育』』原書房, 2011年.

また、本書で用いられる「親たち (parents)」は、必ずしも「両親」「父母」を意味していない。「親たち」というコトンの呼びかけは、ピューリタン家族にあっては「君主、校長、聖職者、そして判事」⁴³のごとき存在であった家父長に向けられていたのである。それはコトンが本書の冒頭において信仰父祖アブラハム (Abraham) を挙げ、「あなたがたが模倣すべき模範的父親」であるとしていることから明らかである⁴⁴。あるいは、コトンが「親たちよ」と語りかける場合、次の箇所のように、文脈上「父親」と読み取るべき展開となっていた。

親たちよ (Parents)、宗教について記されたものを使って、あなたの子どもたちを指導 (instruction) しなさい。彼らに、神、キリスト、福音の神秘、そして偉大なる救いの教義と方法を知らしめなさい。詩編78編5節から7節で命じられている通りである。「彼は我々の父祖 (fathers) に、子どもが生まれて後の世代が興るとき、彼らもそれを知り、その子らに語り継がなければならないと命じた。子らが神を信頼し、彼の戒めを守るように。」エペソ人への手紙6章4節でも命じられている。「父親たちよ (Fathers)、主がしつけ論するように子どもたちを育てなさい。」あなたがたは、子どもたちを賢く善良な者へと育てたいとは思わないのか。もがき苦しみつつ子どもを指導しなければ、それを期待することはできない⁴⁵。

その一方でコトンは、女親に語りかける場合は「母親達よ (mothers)」と呼びかけていた。

父親のみが子どもの救済を求める責任を負っているわけではないことを思い出して欲しい。あなたがた母親 (mothers) が子どもの魂のためにしてやれること、そのための機会は、決して少なくはないのである。(中略) あなたの子どもたちは言う

であろう。「罪のなかで、母は私を身ごもりました」と。おお、それ故に母親たちよ。子どもを罪から救い出すために、できる限りのことをしなさい。特に、母親達よ。子どもたちの救いのために熱心に祈り、再び産みの苦しみを負いなさい⁴⁶。

教育対象である「子どもたち (children)」についても、コトンはその性差や発達段階について極めて無関心であった。彼自身、父親として6人の子どもたちに恵まれ、3人の娘の養育に携わっていたにもかかわらず、本書ではその経験が語られない。〈子ども〉言説が極めて曖昧であり、その対象が男児なのか女児なのか、乳幼児なのか学童、あるいは若者たちなのか、明示されていない。教育対象である子どもの発達的特徴について、関心や配慮が欠落していたのである。コトンは抽象化された〈子ども〉に対して、ひたすら罪の自覚と悔い改めを説いていたのである。

3) 原罪説的人間観

子どもの性差や発達的特徴に無関心であったコトンだったが、人間の本质をめぐる議論では、揺るぎない確信に基づきながら、雄弁に語り出す。カルヴィニズム (Calvinism) に信奉するピューリタン神学者として、コトンは人間存在の性悪性と生来の墮落を説き、子どもといえども原罪 (original sin) から逃れられないと見なしていた。

『秩序ある家族』の10頁から13頁は、子どもの性悪性を警告する言説に溢れている。わずか4頁のなかに列挙された子どもをめぐる言説をすべて抜き出してみよう。

①あなたがたの子どもたちは、生来、死の子どもたち、地獄の子どもたち、怒りの子どもたちであることを知らないのか (Don't you know that your children are the children of death, the children of hell, and the children of wrath by nature?)。

42 子どもの救い (salvation) をめぐる母親へのすすめが示されている箇所には、ソロモン王 (Solomon: 旧約聖書「列王記」に登場する古代イスラエルの王) の母バテシェバ (Bathsheba)、テモテ (Timothy: 新約聖書「使徒言行録」に登場する人物で、カトリック教会等では聖人の1人) の母ユニス (Eunice)、アウグスティヌス (Aurelius Augustinus, 354-430, 古代キリスト教会の神学者) の母モニカ (Monica) が挙げられている。Mather, *A Family Well Ordered*, p.37.

43 Michael Walzer, *The Revolution of the Saints: A Study in the Origins of Radical Politics*, Harvard University Press, 1965, p.190.

44 Mather, *A Family Well Ordered*, p.4.

45 *ibid.*, p.18.

46 *ibid.*, p.38.

- ②あなたから、こうした性質が彼らにもたらされ伝わったことを知らないのか (Don't you know that from you this nature is derived and conveyed unto them?)。
- ③あなたがたの子どもたちは、あなたがたのせいで、神の恐ろしい怒りの下に生まれたのである (Your children are by your means born under the dreadful wrath of God)。
- ④彼らが死ぬ前に生まれ変わらなければ、生まれてこなかった方がよかったのかも知れない (And if they are not born again before they die, it would have been good for them that they have never been born at all)。
- ⑤あなたがたの子どもたちは、酷く傷ついた魂とともに生まれてきたのである (Your children are born with deadly wounds upon their souls)。
- ⑥男よ、あなたの子どもたちは恐ろしい牢獄で死を迎えつつあるが、彼らをそこに幽閉したのは他ならぬあなたなのである (Man, your children are dying of a horrid poison, and it was you who poisoned them)。
- ⑦あなたがたの子どもたちは燃えさかる火の中に投げ込まれており、あなたがたが原因で、神の燃えるような復讐が彼らに及んでいるのである (Your children are thrown into a devouring fire, and it is from you that the fiery vengeance of God has taken hold of them)。
- ⑧ほら、男よ。子どもたちが悔い改めるまで、あなたは愚か者の父親なのである (Alas, man, until your children become regenerate, you are the father of a fool)。
- ⑨あなたがたの子どもたちは粗野で強情な仔雄馬に他ならない (Your children are but the wild ass's colt!)。
- ⑩神の家に連れていかれるまで、あなたがたの子どもたちは悪魔の奴隷なのである (Till your children are brought home to God, they are the slaves of devils)。
- ⑪あなたがたの子どもたちは主イエス・キリストから罰せられるべきであり、外なる暗闇のなかで悪魔に囲まれて永遠に罪に苛まれ苦悶するのである (Your

children should be banished from Lord Jesus Christ, and anguishing under the torments of sin among devils in outer darkness throughout eternal ages?)。

コトンは、子どもの原罪が両親に起因すること、生まれながらに罪深い子どもは呪われていること、それ故に悔い改めて信仰に入らなければ地獄に落ちること等々、子どもの魂を救済する務めを読者に自覚させようとしたのである。

4. 『秩序ある家族』の教育言説

本書は「すべての社会の苗床」である家族において、親子が相互義務を果たしながら敬神 (piety) を育てていくことで、社会秩序の安寧を図ろうと企図されたものであった。コトンは親の義務と子どもの義務の双方を明らかにすることで、神から祝福される家族について論じようとしたのである。

はじめに、コトンは、家父長の責任を説いて、「家族の所有者は、神の定めと掟を守って祝福を受けながら、誠実に家族に属する人々を管理する」うえで、「敬虔な親は子どもの敬神を促し救いに導くために、何をすべきなのか」と問題提起した⁴⁷。

コトンがまず父親に求めたことは、自らの信仰を省みることであった。敬虔な信仰を堅持し、自分自身の悲惨な魂 (miserable soul) に注意を払い、信仰生活に励むことが要求された。その上で、父親には子どもの身体的健康よりも魂の状態に心を砕き、その救済に専心することが必要とされたのである。子どもの魂を救済することが子育ての究極的目的であった。その務めを負いきれず、子どもを地獄に送る父親は「自らを親と呼んではならない。なぜならあなたはダチョウ (ostrich) のように間抜けな現実逃避者であるからである」と非難された⁴⁸。

コトンは、子どもの魂を救済する手段として、幼児洗礼、訓練、忠告、祈りの四つを挙げていた。

幼児洗礼とは、両親の肉欲による産物である子どもをひとたび神に帰し、その命と人生を委ねるための儀式であった。ピューリタン、特に会衆派にとって、回

47 *ibid.*, pp.6-7.

48 *ibid.*, pp.9-13.

心体験を自らの言葉で告白することが極めて重要であった⁴⁹。それ故、親の信仰に基づく幼児洗礼はさして重要な契機ではなかった。それはむしろ、子育ての責任を両親に自覚させるための儀礼であり、コトンは「子どもたちを主イエス・キリストのために育てなさい」と勧めていた⁵⁰。

ピューリタン家族の一員となった子どもは、魂の救いに向けて、父親から指導 (instruction) を受けることになる。乳幼児死亡率が極めて高かった当時、コトンは「おお、親たる者よ。指導を受けずして子どもが亡くなってしまうことがないように！」⁵¹と戒めていた。具体的な指導内容については、礼儀作法 (the rules of civility) をはじめ、読み (read)、書き (write)、計算 (cypher)、職業準備 (be put into some agreeable callings) が挙げられ、息子のみならず娘にも等しく教えていくことが「教育 (education)」において重要とされた。とりわけ重視されたのは宗教教育 (instruction in divine matters) であり、暗唱聖句、教理問答、牧師の説教を家庭で復習することをはじめ、「あらゆる機会を捉えて、幼い輩の魂にあなたの教えを注ぎ込んでいく」よう説かれていた⁵²。指導内容をめぐりスコープとシークエンスのようなカリキュラム原理が確立されていなかったものの、「彼らは口の狭い器 (Narrow-mouthed vessels) であるから、ものごとは一滴一滴彼らに注ぎ込まれるべきである」⁵³と、子どもの性状を踏まえた指導をするように説いていた。

忠告 (charges) は父親が子どもに対して信仰的・人格的感化を与える有効な手段であった。コトンは、一人一人呼び寄せて忠告を与え、その遵守を約束させることを忘れないようにと父親に教えていた。忠告の論拠を聖書に求め、神の命令に従うこと、イエスを主として信じること、祈りを忘れないこと、思慮に欠ける行動を慎むこと、悪い仲間とつき合わないこと等を説

いていた。その上でコトンは「あなたの命が続く限り、子どもたちに命令を与え続けること。もしも可能であるならば、死を迎えたとき、厳粛に最後の忠告を与えるがよい。死にゆく親の言葉ほど鮮やかに生き続けるものはないだろう」⁵⁴と述べ、子どもに何を伝えるべきかあらかじめ書き記しておくように勧めていた。

コトンによるならば、すべてにまさるものは祈りであった⁵⁵。彼は警告する。「男よ。汝の家族は異教徒の家族である。もしも祈らなかつたとすれば。汝の家族から出た子どもたちはドラゴンの棲む所へと落ちていく。天国に入れず、地獄の底から、汝に向かって彼らの憎悪が注がれるであろう。」⁵⁶ 祈りの家族を形成するためにも、家長たる父親は祈りの人となり、子どもの名前を1人ずつ挙げて救いを祈ること、祈りと共に断食すること、特に「子どもを秘密の小部屋 (secret chambers) に連れて行き、あなたが神の御前に立つとき、子どもをあなたの傍らで跪かせ、主が子どもを祝福するように求めなさい。子どもの救いのためにあなたが苦悶しているところで、あなたの呻き声を聞かせ、涙を流して祈る姿を見せ、苦悩を目の当たりにさせなさい。子どもたちはあなたのしていることを決して忘れないだろう。それは彼らに驚くべき力を及ぼすのである」⁵⁷と述べられていた。

訓育、忠告、祈りがフォーマルな家庭教育であるとすれば、インフォーマルな教育力として、父親の権威 (authority) と模範 (example) の二つが挙げられていた。権威は秩序を維持するために不可欠な要素である。ニュー・イングランドの福音主義者 (Evangelicals) の精神気質を分析した歴史家グレーヴェン (1977) は、ピューリタンにとって権威とは、権力 (power) と同義にして絶対的支配を意味しており、親の権威と権力は家庭内では疑う余地がなかったと指摘している⁵⁸。コトンも「子どもへの権威を失えば、その福利

49 詳しくは次の論文を参照のこと。佐藤哲也「ピューリタンの教育思想における回心体験の問題 — 17世紀ニュー・イングランド会衆派の「回心体験録」説教集分析を中心に —」教育史学会『日本の教育史学』第38号, 1995年, pp. 287-305.

50 Mather, *A Family Well Ordered.*, pp.13-17.

51 *ibid.*, p. 17.

52 *ibid.*, pp. 17-21. しかし、「狭い器」言説は、ローマの教育家クインティリアヌス (Marcus Fabius Quintilianus, 35頃~100頃) からの引用であることは明らかである。コトンは自らの省察から子どもの発達特徴に教育的指導を合わせていく必要に気づいた訳ではなかったようである。Quintilianus, *Institutio Oratoria, Libri XII*, 95-96? 小林博英訳『雄弁家の教育1』明治図書, 1982, p.41.

53 Mather, *A Family Well Ordered.*, p.20.

54 *ibid.*, pp. 29-30.

55 "Player must be the crown of all," *ibid.*, p. 32.

56 *ibid.*, p. 35.

57 *ibid.*, p. 35-36.

(welfare) に何ら資することができない⁵⁹としていた。しかしコトンは、子どもに対する高圧的な態度を戒め、父親の権威はどうあるべきかを論じていた。「子どもの意志を挫くほど荒々しく権威を振るってはならない。そのように厳しく、子どもを奴隷のように扱うと、彼らは我々の面前にでることを恐れ、憎悪するようになり、その結果、天の父 (our Heavenly Father) を忌み嫌うようになってしまう。」⁶⁰

そうしたコトンの姿勢は体罰に対する態度に現れていた。彼は聖句を引いて(箴言13章24節、19章18節、23章13、14節) 体罰の必要性を説きつつも、「激情に駆られて子どもを鞭打ってはならない。怒りが鎮まるまで待ちなさい。神に対する純粋な服従心から、罰を受ける者を心から悔い改めさせるために、あなたが彼らを罰していることを、痛みの中に思い知らせなさい」⁶¹と教えていた。コトンは、子どもを救いに導くためには、厳しさの中にも愛情が不可欠であり、神への恐れと信仰を子どもに示していくこと、つまり父親が良き模範となる必要性を説いていた。コトンは「あなたが示す見本は、あなたが語りかける言葉よりも、子どもたちの救いに大いに役立つかもしれない」と述べていた⁶²。

これに続いて、親に対する子どもの義務が説かれていくことになる。扉書きには「レビ人は大声でイスラエルのすべての人々に告げて言わなければならない。父と母を軽んずる者は呪われる。民はみなアーメンと言わなければならない」とする申命記27章14節と16節が掲げられた。コトンは、子どもたちに向けて、親を軽んじてはならないこと、親への義務を怠ってはならないこと、親を畏敬 (Reverence) し、従順 (Obedience) な態度を示し、恩返し (Repentance) ししていくことを教えていった。

コトンは、特に母親がその優しさ (fondness) と弱さ (weakness) 故に蔑まれ無礼な扱いを受けがちであると指摘して、そうした子どもの態度や行状が神の怒りを招くと戒めた⁶³。「汝の父と母を敬え」という第五戒への義務を怠り、「親への義務を果たさない子どもたちは、恐るべき被造物となって、淫行、不正直、嘘言、その他嫌悪感を催させるあらゆる行状に身を委ねる」⁶⁴、親に背く子どもには神罰が下り、財産をはじめ身体にまで呪いが及び、疫病は言うに及ばず、死して地獄に落ちるとみなされたのである⁶⁵。

こうした過ちを犯さないためにも、子どもは両親を畏敬して、内的態度と外的行動によってそれを示さなければならなかった。神の代理人たる両親が子に語る際には、子どもは起立してその話に耳を傾け、節度を持って話しかけるようにと、コトンは説いたのである⁶⁶。また、聖句(エフェソの信徒への手紙6章1節、コロサイの信徒への手紙3章20節、箴言4章1節)を引きながら、「～する子どもは両親によって軽んじられる」と逆説的論説を展開した。例えば「もしもあなたの方が、両親が望むことを行わず、それにもまして、彼らが禁じることを行うならば、あなた方は彼らから軽んじられる」⁶⁷と非難していた。

最後に、コトンは両親への恩返しについて、何よりも、不信仰ほど恩知らずなことはなく、悔い改めて信仰に励むことで「あなたを産み、パンを与え、養い、あなたのために幾千もの悲しみに耐えた両親に報いる」ように勧めた⁶⁸。

5. おわりに

『秩序ある家族』は、ピューリタン家族における親

58 Philip Greven, *The Protestant Temperament: Patterns of Child-Rearing, Religious Experience, and the Self in Early America*, Alfred A. Knop, 1977, p.90.

59 Mather, *A Family Well Ordered*, p.22.

60 *ibid.*, p. 22.

61 *ibid.*, p. 25.

62 *ibid.*, pp. 32-33.

63 *ibid.*, p. 41.

64 *ibid.*, p. 45.

65 *ibid.*, p. 53.

66 *ibid.*, pp. 59-61.

67 *ibid.*, p. 63.

68 *ibid.*, p. 65. その上で、共和国 (commonwealth) 内には様々な立場の親、すなわち、召使いに対しては親方が父親で女主人が母親、教会にあっては牧師が、学生にとっては学者が親代わりであることが説かれた。子たる立場の者は親たる者からの通告に敬意を払い、それに聞き従っていくことが求められた。なお、本論に続く補遺では、宗教改革者たちが学校設立に熱心であったこと、近隣によい学校を設立して運営することが牧会上大切な課題であること、学校教育と学問を修めた人材を育成することは現世で宗教が繁栄する条件であること、など学校教育の意義をめぐる考察が掲載されていた。

子関係や教育課題をめぐる旧新約聖書コンコルダンス (concordance: 語句集) の様相を呈していた。これはコトンのみならず、ピューリタン・ライターに共通する特徴であった。聖書主義を標榜するピューリタンは、生活上の倫理指標を聖書に求めていった。コトンは、墮落した人間本性、悔い改の必要性、敬虔な信仰のみが救いの可能性を開らくことについて、聖句を引証しながら説いていったのである。

名誉革命後の市民社会を展望しながら希望に彩られた議論を展開したロックに比べると、コトンのそれは危機感と緊張感に充ち満ちていた。『秩序ある家族』を支配する精神的雰囲気は、コトン自身が対峙した現実、すなわちニュー・イングランド第3世代から第4世代への信仰継承問題、宗教的均質性の崩壊、本国と植民との関係悪化、インディアン戦争、疫病の蔓延、自らの家族問題などから醸成されたからである。彼の言説がリアリズムや子どもへの愛情表現に乏しく、医学的・哲学的知見も欠落していたのは、本書が説教を中心に内容構成されたことに起因すると言えよう。説教を通じて展開された神学的議論が『秩序ある家族』という家庭教育書として結実していったのである⁶⁹。

我々は、『秩序ある家族』から中世から近代へと至る教育思想の過渡期的性格を読み取ることができる。家父長としての父親の権威を説く一方で、親切に (kindness)、柔和に (meekness)、優しく (loving tenderness) 子どもに接することを勧める言説には、子どもに対するコトンの両義的まなざしが表れている⁷⁰。怒りに任せた体罰に極めて批判的であったことにも、子どもに対する彼の心情を窺うことができよう。「〈子ども〉の発見」前夜、〈子ども〉存在への恐れと愛の狭間で、コトンは揺れ動いていたのである。

その一方で、信仰という実存的かつ内面的な問題が教育論議の対象となったことを見逃してはならない。コトンは、「子どもには貴重な (precious)、そして朽ちることのない (Immortal) 魂がある」⁷¹ と主張した。その魂を救済するために、子どもの内面的性情への細心の注意が払われていったのである。魂という、不可知で、しかし子どもに確かに内在する対象が、教育的

営為の射程に収められることになる。子どもの行状のみならず、それを生み出す内面性、精神性へと関心が高まったのである。その上で、子どもの魂に働きかけて悔い改め (regeneration)、回心 (conversion) へと導こうとする志向性は、子どもの内面統制に苦心する近代教育に先鞭を付けていったのである。

文 献

- Ahlstrom, Sydney E. [1972] *A Religious History of the American People*, Yale University Press.
- Bosco, Ronald A. ed. [1976] *Paterna: The Autobiography of Cotton Mather*, Scholars' Facsimiles & Reprints Delmar.
- Burg, B. R. [1976] *Richard Mather of Dorchester*, The University Press of Kentucky.
- Ford, Worthington Chauncey ed. [1911] *The Diary of Cotton Mather I*, Frederic Unger Publishing.
- Gouge, William [1626] *Of Domesticall Duties, second edition*, London.
- Greven, Philip [1977] *The Protestant Temperament: Patterns of Child-Rearing, Religious Experience, and the Self in Early America*, Alfred A. Knopf.
- Hall, Michael G. [1988] *The Last American Puritan: The Life of Increase Mather*, Wesleyan University Press.
- Hansen, Chdwick [1971] *Witchcraft at Salem*, Arrow Books (邦訳『セイレムの魔術 17世紀ニューイングランドの魔女裁判』飯田実訳, 工作社, 1991年)
- Hiner, N. Ray [1979] "Cotton Mather and his Children: The Evolution of a Parent Educator, 1686-1728", Babara Finkelstein ed. *Regulated Children/Liberated Children: Educaion in Psychohistorical Perspective*, Psychohisory Press, pp.24-43.
- Hiner, N. Ray [1985] "Cotton Mather and His Female Children: Notes on the Relationship between Private Experience and Public Thought", *The Journal of Psychohistory*, Vol.13, No.1, p.33-39.
- Holmes, Thomas J. [1974] *Cotton Mather: A Bibliography of His Works, 3 vols*, Blue Mountain Books & Manuscripts.
- Hooker, Samuel [1677] *Righteousness Rained from Heaven*, Cambridge.
- Locke, John, Some Thoughts concernig Education, London, 1693 (邦訳『ジョン・ロック『子どもの教育』』北本

69 例えば、『育児室での気苦労 (Cares about the Nurseries)』(1702年) もカルヴァン主義的色彩に染められているが、より詳細にカテキズム指導論が展開されていた。

70 Mather, *A Family Well Ordered*, p. 22.

71 *ibid.*, p.9.

- 正章訳, 原書房, 2011年)
- Maclaren, Angus [1990] *A History of Contraception: From Antiquity to the Present Day*, Blackwell.
- Mather, Cotton [1689] *Right Thoughts in Sad Hours*, London.
- Mather, Cotton [1692] *Ornaments for the Daughters of Zion*, Boston.
- Mather, Cotton [1694] *Help for Distressed Parents*, Boston.
- Mather, Cotton [1699] *A Family Well-Ordered*, Boston.
- Mather, Cotton [1700] *Token for Children of New England*, Boston.
- Mather, Cotton [1702] *Magnalia Christi Americana*, London.
- Mather, Cotton [1710] *Bonifacius: or Essays to Do Good*, Boston.
- Mather, Eleazar [1671] *A Serious Exhortation to the Present and Succeeding Generations in New England*, Cambridge.
- 大木英夫 [1966]『ピューリタニズムの倫理思想 — 近代化とプロテスタント倫理との関係—』新教出版社.
- Middlekauff, Robert [1971] *The Mathers: Three Generations of Puritan Intellectuals, 1596-1728*, Oxford University Press.
- Pope, Robert G. [1970] *Half-way Covenant: Church Membership in Puritan New England*, Princeton University Press.
- Silverman, Kenneth [1984] *The Life and Times of Cotton Mather*, The Easton Press.
- Quintilianus, *Institutio Oratoria, Libri XII*, 95-96? (邦訳『雄弁家の教育1』小林博英訳, 明治図書, 1982年)
- 佐藤哲也 [1995]「ピューリタンの教育思想における回心体験の問題 — 17世紀ニュー・イングランド会衆派の「回心体験録」「説教集」分析を中心に —」教育史学会『日本の教育史学』第38号, pp. 287-305.
- Tannenbaum, Rebecca [2012] *Health and Wellness in Colonial America*, Greenwood.
- 柳生望 [1981]『アメリカ・ピューリタン研究』日本基督教団出版局
- Walzer, Michael [1965] *The Revolution of the Saints: A Study in the Origins of Radical Politics*, Harvard University Press.
- Ziff, Larzer [1962] *The Career of John Cotton: Puritanism and the American Experience*, Princeton University Press.

(平成24年 9月28日受理)